

四国遍路と接待*

藤原 武 弘**

問題

接待とは、遍路に対して近隣村落民などが札所や遍路道沿いなどで金品を与えるという慣行である（星野，2001）。接待の特徴は、乞われて初めて与えるという受動的態度ではなしに積極的援助という能動的姿勢がその根底となっている（星野，2002）。また星野（2001）は接待を3つの要素から構成される慣行として捉えている。3つの要素とは、接待をする者（接待者）、それを受ける者、つまり遍路を行なっている者（遍路者）、そして、やりとりされる接待金品である。その相互関係性を示すと図1のようになる。遍路者が接待を受けることの効果はあるのか、あるとすれば、どのような影響を遍路者に与えているのだろうか。また逆に遍路者に対して接待を行なうことで、どのような効果が接待者側に生じるのだろうか。

この接待という慣行は、歴史的にみるならば四国遍路のみに特有な慣行ではなく、西国33か所観音霊場巡拝を始めわが国の各種の巡礼にみられた。またヨーロッパ巡礼においても類似の現象があることが知られている。たとえば Frey（1998）

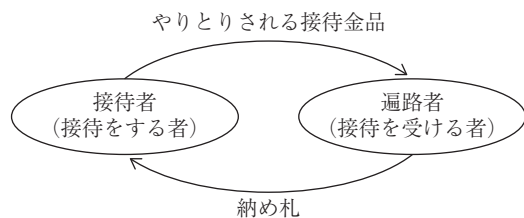


図1 接待の3要素

によれば、スペインでもサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼者という理由だけで、しばしば暖かく親切にもてなされる。また新鮮な飲み物あるいは菓子が提供されることも珍しいことではない。もちろん当然のことだが、巡礼者であるシンボルの貝殻や杖を身につけている必要がある。

前田（1971）によると、接待の形式としては、(1) 個人接待 (2) 霊場付近の住民が集団で行うもの (3) 接待講という形で他県民が霊場にやってきて行うものの3つに分けられるが、本論文では集団接待ではなく、個人で行う接待に限定し論じていくことにする。

接待を受ける側に関する実証的研究としては坂田（1999）がある。彼のデータによると、接待の風習は色濃く残っていることが明らかにされている。春遍路の約7割前後の者が接待を受けている。徒歩遍路では86.4%、車遍路では66.2%であり、明らかに徒歩遍路の方が接待を受けやすい傾向にある。それに対して、車道を走り去る車遍路は接待を受ける機会はほとんどない。それにもかかわらず、車遍路の約6割強が接待を受けているのは、各札所や霊場における集団接待が存在しているからであろう。

接待の内容に関しては、徒歩遍路者が「お金」51.5%、「食べ物・飲み物」が79.9%、「サービス・手助け」が26.1%、を接待されるのに対して、車遍路では、「お金」3.0%、「食べ物・飲み物」55.2%、「サービス・手助け」4.5%であり、明らかに接待内容が大きく異なる。

近年、徒歩遍路を経験した人が書いた紀行文やエッセイが増加している。その中で接待を受けたという記述が数多く見られる。そこで藤原

*キーワード：四国遍路、接待、ホスピタリティ

**関西学院大学名誉教授

(2003) は四国遍路手記を内容分析している。2000年までに出版されたもので、21冊が分析の対象となった。分析内容は、著者名、書名、ページ数、出版社、出版年、性、年齢、遍路年齢、住所、職業、信仰の有無、遍路のタイプ、遍路の時期、日数、遍路の動機、接待内容、遍路により得たもの等多岐にわたる。接待内容は、多いものからあげると「お金」(162)、「飲み物」(121)、「食べ物」(82)、「果物」(65)、「菓子」(60)の順であった。県別にみた接待の総数は愛媛(34)、高知(25)、徳島(25)、香川(18)の順になるが、全距離の中で各県の占める割合を計算し、理論値と実測値を比較した。その結果、期待値以上に実測値高いのは徳島県、逆に低い県は高知県という興味深い事実を見出している。紀行文を内容分析した結果、県別に見ると徳島の人々は接待をよくし、高知県の人々は接待をしない傾向にあることが判明した。

遍路と遍路道に関するアンケート調査データ(長田・坂田・関, 2003)では、「四国遍路をしているときにもっとも充実感を感じるのはどのようなときですか」との問いに、霊場でお詣りをしているとき45.9%、霊場の山門に着いたとき38.3%、お大師様と共に歩いていると感じるとき30.4%、お接待や親切に触れたとき24.8%、先達や他の人と話をするとき15.9%、つらい道中を顧みるとき15.3%となり、接待が遍路者に充実感を与えていることが分かる。高知県企画振興部企画調整課(2003)による調査でも、歩き遍路の人々は「霊場に着いたとき」「自然、文化に触れたとき」に充実感を感じているが、それに加えて「お接待や親切に触れたとき」にも充実感を感じている。

接待をする側の実証的研究の嚆矢は藤沢(1997)であろう。そこでは接待率、接待の時期、接待動機、接待する物の種類などが面接調査により明らかにされている。調査対象者は、納経所で聞くことが多かったので、主に納経所で仕事をしている人やお坊さんに聞き取りを行なったという記述がある。残念なことに、この調査の問題点は想定される母集団が何で、どのように標本抽出が行なわれたのかという点が明らかではないことである。お寺に関わりの強い人々が調査対象者になっており、その人々の意見を調査しているに過ぎ

ない。接待内容は、「餅・草餅」(38.4%)、「お菓子(32.0%)」、「みかん(25.6%)」、「ポケットティシュー」(17.9%)、「菓子パン」(16.7%)、「ジュース」(15.4%)、「ヤクルト」(15.4%)の順になる。

星野(2001)は1番霊場霊山寺から10番霊場切幡寺までの遍路道沿いで住民に接待経験についてアンケート調査を行った。「いままでお遍路さんに接待したことがあるかどうか」という質問についての結果、あると回答したに人数は162人であった。接待経験がある者は59.6%であった。接待内容は、多いものからあげると「お金」、「お茶」、「みかん」、「ジュース」、「お菓子」の順であった。

接待の理由・動機としては、「激励のため」69人、「少しでもお遍路さんの助けになりたいから」53人、「先祖供養のため」40人、「自分の代わりにお遍路をしてくれていると思うから」35人、「親あるいは祖父母など代々がお接待をしてきたから」31人、「お遍路さんに接待することはお大師様に接待することだから」30人と続いている。

遍路者を対象とした研究例は比較的多いが、接待者を対象とした研究は藤沢と星野の2件のみで非常に少ない。しかも従来の研究は単なる実態調査報告にとどまっており、統計的処理も単純集計のみである。クロス集計や回帰分析、多変量解析等の方法も含めて、接待を行なうことの心理的要因を考慮した研究は今まで皆無であるので、本研究では接待行為を弁別する心理的要因を明らかにする。

目的

現代の四国遍路の接待者の実態を調査することで、どのような人々が接待をするのか、なぜ接待をするのか、接待を繰り返し続ける背景には一体何があるのか、接待後の感情や気分はどのようなものなのか、接待者と遍路者の間には心理的なサイクルは存在するのか。本研究は、接待者と接待を受ける者(遍路者)との相互依存関係に注目しながら、接待の良好な循環現象を明らかにする。接待行動を行なう者と行なわない者を弁別する心理的要因として、デモグラフィック要因、信仰

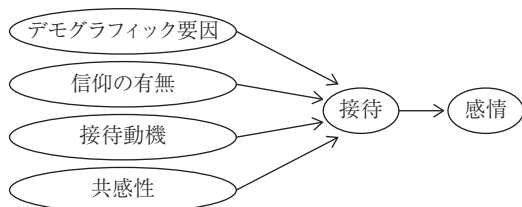


図2 心理的要因の関連構造

の有無、接待動機、共感性を測定し、接待者と接待を受ける者（遍路者）との相互依存関係を明らかにする（図2参照）。

方法

2010年5月初旬、9月中旬～10月中旬に質問紙を使って、調査対象者宅を訪問し調査した。その場での回答が得られない場合は質問紙を手渡し、後日再度訪問して回収した（回収率100%）。

調査場所・調査対象者

愛媛県松山市にある第52番霊場太山寺町から第53番霊場円明寺までの愛媛県道183号、54番札所に続く国道196号線の遍路沿いおよび札所近くの住民（太山寺町、和気町、北条）。質問紙の回答が困難なお年寄りに関しては質問紙に沿って聞き取り調査を実施した。

調査項目

【フェイスシート】

年齢、性、職業、家族構成、居住地域、信仰している宗教の有無、信仰している宗派

【接待行動に関する項目】

接待の種類：遍路者に対してどのような接待を行なったのか？ 選択肢1) お金、2) 食べ物、3) 飲み物、4) 物品、5) 善根宿、6) 車の相乗り、7) 洗濯、8) 道案内、9) 激励の言葉、10) その他。

接待動機：接待の理由と動機は星野（2001）の調査項目に従った。具体的な内容は以下である。1) お遍路さんに接待することはお大師様に接待することになるから 2) 先祖供養のため 3) 自分の代わりにお遍路してくれていると思うから

4) 激励のため 5) 少しでもお遍路さんの助けになりたいから 6) 親あるいは祖父母などが代々がお接待をしてきたから 7) 自分が遍路をした時にお接待をもらったので、その返礼に 8) 地区活動だから 9) 納め札をもらいたいから 10) その他。なお前田（1971）は、接待の動機を 1) 難行苦行する遍路への同情心から 2) 遍路イコール弘法大師空海という信仰から 3) 祖先供養のため 4) 自分が遍路に出る代わりに接待することで善根を積もうとするため 5) 自分が遍路の時に接待を受けたことへの返礼のための5つを指摘しているが、実証的な研究がなされていないので、比較のことも考慮して星野（2001）による動機を採用した。

接待後の気分・感情：一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木，2000）の24項目から因子負荷量の大きさを考慮して、ポジティブ感情、ネガティブ感情、安静状態をそれぞれ6項目ずつ、合計18項目について「1. 全くなかった」～「5. とても頻繁にあった」の5段階で回答を求めた。具体的な項目については、図13を参照。

【遍路経験に関する項目】

遍路経験の有無、遍路時の移動手段、遍路時に受けた接待の有無

【共感性に関する測定尺度】

共感力スケールはMaemura, Kosugi, & Fujihara, (2007)の44の項目から選択した。認知的共感力、情動的共感力、共感動機の各因子から3項目ずつの計9項目を選び、「1. まったくあてはまらない」～「5. 非常にあてはまる」の5段階で回答を求めた。

〈認知的共感力（他者の感情について理解する認知的能力、共感できる力）〉

- ・相手の態度から感情を読み取ることができるほうだ
- ・表情を見ることで、相手がどんな気持ちでいるかわかる
- ・相手がどう感じているかを自分も同じように感じることができる

〈情動的共感力（他者の感情を見聞きして、同じような感情が引き起こされる力、他者感情を感じ

る力))

- ・ほかの人に不幸なことが起こっても、自分に直接関係なければ気にしない(逆転項目)
 - ・困っている人を見るとすぐ手助けしたくなる
 - ・ほかの人が問題を抱えているのを見てもあまり同情しないときがある(逆転項目)
- 〈共感動機(他者の感情や態度、自分と異なる立場を理解しようと心がける力、動機)
- ・人々の感情や気持ちを理解しようと心がけている
 - ・相手の立場に立ってものを考えることにしている
 - ・物事を決めるには、反対意見をよく聞いてからにしようとする

結果

調査対象者数は73人(男性19人、女性56人、平均年齢51.22歳、 $R = 17 \sim 83$ 歳、 $SD = 14.27$)であった。年齢別では、図3に示したように50代38.4%が最も多く、60代16.4%、40代15.1%、30代12.3%、20代8.2%、70代6.8%、80代1.4%、10代1.4%と続いている。

回答者の職業は、図4に示したように主婦34.2

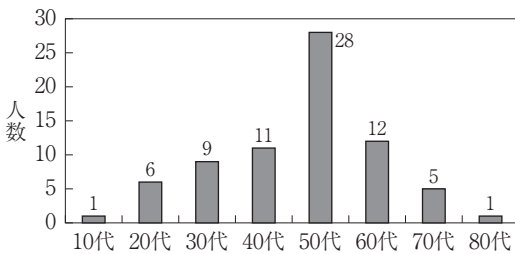


図3 調査対象者年齢

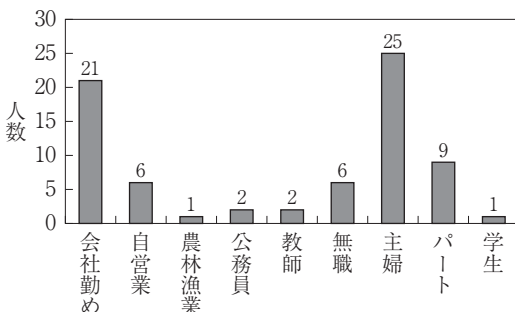


図4 調査対象者の職業

%、会社勤め28.8%、パート12.3%、無職8.2%、自営業8.2%、公務員2.7%、教員2.7%、農林漁業1.4%、学生1.4%と続いている。

信仰している宗教の有無は、図5に示したように、信仰する宗教が「あり」65.8%、なしが34.2%であった。

宗派は真言宗が68.8%、浄土真宗8.3%、神道6.3%、浄土宗4.2%、キリスト教4.2%、臨済宗2.1%、その他6.3%である(図6参照)。

接待行動に関連する心理的要因

回答者の接待経験の有無は、あり44%、なし56%である(図7参照)。接待内容については、

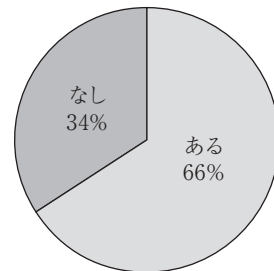


図5 宗教の有無

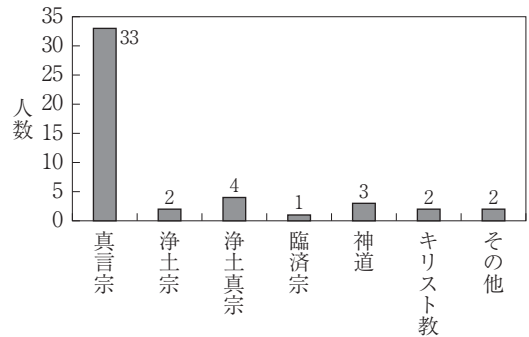


図6 回答者の宗教

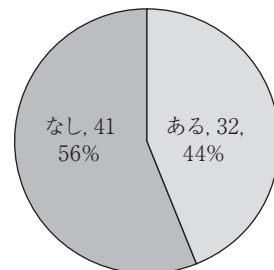


図7 接待経験の有無

図8に示したように、道案内21.7%が最も多く、食べ物19.6%（すし、うどん、弁当、パン、みかん、いよかん、おかし等）、飲み物16.3%（茶、ジュース、甘酒、コーヒー、水等）、激励の言葉14.1%、お金12.0%（100円から1000円程度）、物品8.7%（根付、線香入れ、手作りのマスコット、カイロ等）、善根宿3.3%、車の相乗り2.2%、その他2.2%、洗濯0%である。

接待経験を年齢別に見ると、年齢が高くなるにつれ接待する率は高まる（図9参照）。年齢と接待経験の有無とのピアソンの相関係数を計算すると $r = .36, p < .01$ で統計的にも有意である。

接待経験の有無と信仰心の有無とは統計的には関連が示されなかった ($\chi^2(1) = 2.16, n.s.$)（表1参照）。

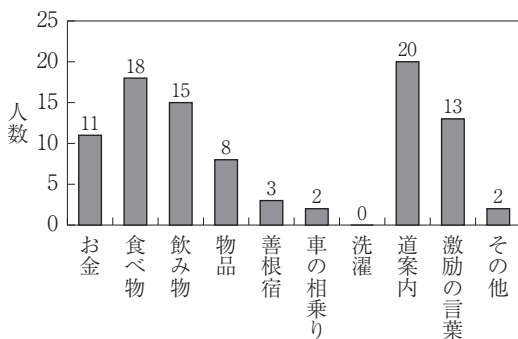


図8 接待の内容

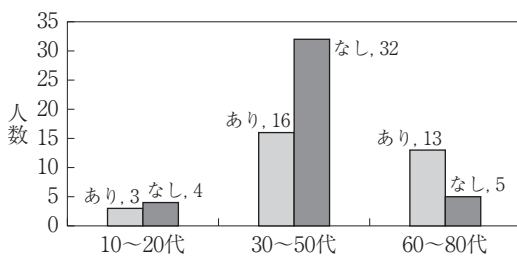


図9 接待経験と年齢

表1 接待経験と信仰心のクロス集計表

| | | 信仰心の有無 | | 合計 |
|------|----|--------|----|----|
| | | あり | なし | |
| 接待経験 | あり | 24 | 8 | 32 |
| | なし | 24 | 17 | 41 |
| | 合計 | 48 | 25 | 73 |

接待の動機

接待の動機は、図10に示したように、「激励のため」18.6%、「少しでもお遍路さんの助けになりたいから」18.6%の2つが最も多く、「お遍路さんに接待することはお大師様に接待することだから」17.4%、「地区活動の一貫として」11.6%、「自分の代わりにお遍路をしてくれていると思うから」9.3%、「先祖供養のため」8.1%、「親あるいは祖父母など代々がお接待をしてきたから」7.0%、「自分が遍路をした時にお接待を受けたので、その返礼に」4.7%、「人助けのため」4.7%、「納札をもらいたいから」0%であった。

接待経験のある人は、接待をこれからも続けたいと思う100%、思わない0%であった。

接待経験のない人の理由については、「機会がなかったから」95.1%、「興味がないから」0%、「接待ということを知らなかったから」2.4%、「したくないから」2.4%であった。

接待経験のない回答者に対する接待を試みたかとの回答は、「してみたいと思う」65.8%、

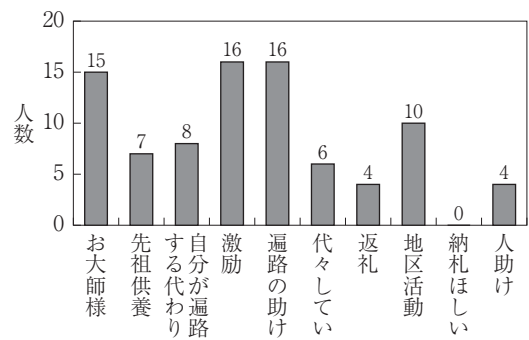


図10 接待の理由・動機

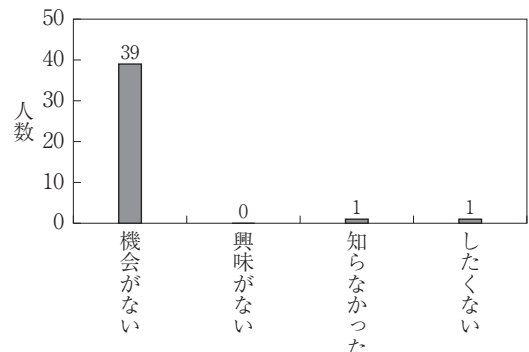


図11 接待経験なしの理由

「思わない」34.1%である。

共感性と接待行動の関係

接待行動の有無と、認知的共感力、情動的共感力、共感動機との関係を明らかにするためにピアソンの相関係数を算出した。認知的共感と共感動機は無相関で、情動的共感のみがろうじて有意に関連していた ($p < .10$)。

感情と接待との関係

接待に伴う感情反応の平均値は図13に示されている。接待経験は、「充実した」、「楽しい」、「ゆったりした」、「平穏な」、「のどかな」とい

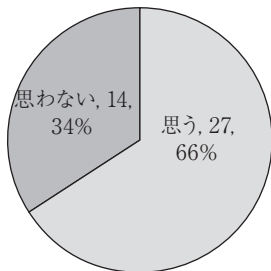


図12 接待をしてみたいと思うか

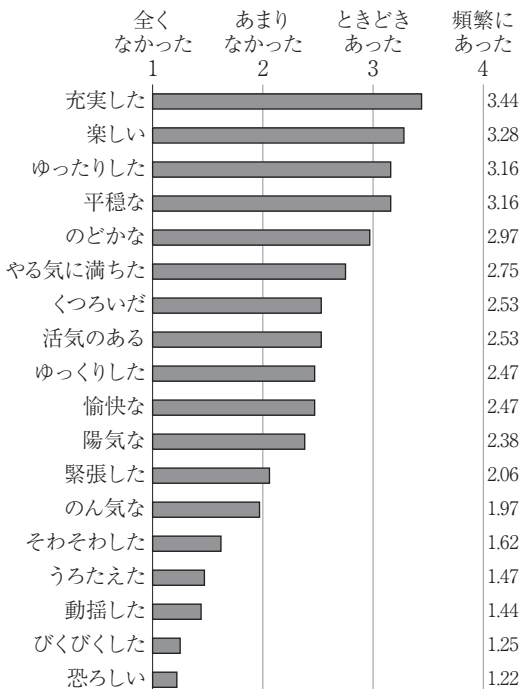


図13 接待後の感情反応

た感情を伴うことが示されている。

表2は得られた感情反応データに因子分析(重みなし最小二乗法・プロマックス回転)を行った結果である。共通性が0.30未満であった「うろたえた」の項目を除外し、4因子に固定し回転を行なった。第1因子は「陽気な」「平穏な」「愉快的な」「のどかな」「くつろいだ」といった落ち着いた感情に関する項目への負荷が高いことから「安定型感情」と命名した。第2因子は「びくびくした」「恐ろしい」「動揺した」といったネガティブな感情に関する項目への負荷が高いことから「不安型感情」と命名した。第3因子は、「やる気に満ちた」「充実した」といった項目への負荷が高いことから「積極型感情」と命名した。第4因子は「緊張した」「楽しい」といった項目であることからある種の「興奮型感情」と命名した。各因子のCronbachの信頼性係数 α は安定型感情(8

表2 一般感情尺度の因子分析結果

| 項目 | 因子 | | | |
|--|-------|-------|-------|-------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 |
| F1: 安定型感情 ($\alpha = .90$) | | | | |
| 陽気な | 0.95 | -0.08 | 0.01 | -0.14 |
| 平穏な | 0.86 | -0.03 | 0.13 | -0.30 |
| 愉快的な | 0.68 | -0.12 | -0.14 | 0.42 |
| のどかな | 0.61 | 0.14 | 0.37 | -0.04 |
| くつろいだ | 0.60 | -0.10 | -0.15 | 0.43 |
| ゆったりした | 0.49 | -0.01 | 0.07 | 0.44 |
| ゆっくりした | 0.48 | 0.17 | 0.05 | 0.12 |
| のんきな | 0.42 | 0.41 | 0.20 | -0.02 |
| F2: 不安型感情 ($\alpha = .82$) | | | | |
| びくびくした | -0.05 | 0.88 | 0.04 | 0.07 |
| 恐ろしい | -0.22 | 0.86 | 0.03 | 0.00 |
| 動揺した | 0.09 | 0.82 | -0.05 | 0.07 |
| そわそわした | 0.30 | 0.49 | -0.43 | -0.14 |
| F3: 積極型感情 ($\alpha = .90$) | | | | |
| やる気に満ちた | -0.05 | 0.01 | 0.93 | 0.18 |
| 充実した | 0.17 | -0.12 | 0.81 | -0.09 |
| 活気のある | 0.38 | -0.02 | 0.57 | 0.00 |
| F4: 興奮型感情 ($\alpha = .53$) | | | | |
| 緊張した | -0.30 | 0.12 | 0.07 | 0.82 |
| 楽しい | 0.20 | -0.03 | 0.09 | 0.50 |
| 因子相関行列 | F1 | F2 | F3 | F4 |
| F1 | - | 0.22 | 0.55 | 0.39 |
| F2 | | - | 0.27 | 0.13 |
| F3 | | | - | 0.28 |

表3 感情と共感性の関係

| | 認知的共感性 | 情動的共感性 | 共感動機 |
|-------|--------|--------|------|
| 安定型感情 | .32 | .18 | .10 |
| 不安型感情 | -.15 | -.46** | -.15 |
| 積極型感情 | .30 | .49** | .40* |
| 興奮型感情 | .18 | .11 | .18 |

* $p < .05$ ** $p < .01$

項目)が $\alpha = .90$ 、不安型感情(4項目)が $\alpha = .82$ 、積極型感情(3項目)が $\alpha = .90$ 、興奮型感情(2項目)が $\alpha = .53$ であった。

接待動機と感情との関係を明らかにするためにピアソンの相関係数が計算された。その結果、積極型感情の簡便的因子得点と接待動機との間に統計的に有意な関係を示したのは、「自分の代りにお遍路をしてくれていると思うから($r = .40$)」と「激励のため($r = .52$)」の2項目であった。

感情と共感性の関係

表3に示したように、積極型感情と情動的共感性は、正の有意な相関関係にある。同様に積極型感情は共感動機とも正の相関関係が有意である。不安型感情と情動的共感性は、負の有意な相関係数が得られ、不安感が高い人々は、情動的共感性が低く、不安感の低い人々は共感性が高いことが示されている。

考察

愛媛県松山市第52番霊場大山寺、第53番霊場円明寺近くで行われた今回の調査によると、接待経験のある人の割合は43.8%であった。それに対して、徳島県の第1番霊場霊山寺から第10番霊場切幡寺までで行なわれた星野(2002)の調査によると、接待経験の割合が59.6%であった。統計的な誤差を考慮すれば、おそらく接待率は愛媛県の方が若干低いのではないと思われる。藤原(2003)は、徳島県の人々は接待をよくする傾向にあるが、逆に高知県は接待をしない傾向にあることを指摘しており、地域差が存在することは、興味深い事実である。しかし接待の内容はお金、食べ物、飲み物などで、愛媛県と徳島県の調査結果との間に大きな差は見られなかった。また本研究の調査結果によると、主な接待動機は「激

励のため」「少しでもお遍路さんの助けになりたいから」「お遍路さんに接待することは大師様に接待することだから」であり、星野(2002)の調査結果と類似していた。動機として「納め札をもらいたいから」は本調査においてもゼロであり、星野の研究結果とも符合している。

前田(1971)によると、接待者と遍路の間にはギブ・アンド・テイク的な関係が見られる。つまり、接待者は遍路に品物を施すことによって、現世利益的なものを得ようとしている。接待は必ずしも無償の行為ではなくお大師さんからの返礼を期待している行為なのである。

Sahlinsは互報性を交換形態の連続体と捉え、一般的互酬性、否定的互酬性を両極として、均衡的互酬性を中間点とする、互酬性のスペクトラムとして提示した。これら3つについてのSahlinsの説明をまとめると、一般的互酬性は利他的な取引(トランザクション)で、贈与に対する返礼は必ずしも期待されていない。一般には、分与、親切なもてなし、惜しめない贈与、手助け、気前のよさなどと呼ばれているものである。均衡的互酬性は直接的な交換であり、贈与に対して適切な返礼が遅延無くなされるものである。否定的互酬性は、功利的な取引(トランザクション)であり、値切り、詐欺、窃盗がその例である。星野・浅川(2011)も同様のことを指摘している。つまり巡礼者と接待者の間には呪物や呪力といった宗教的なものと財・サービスといった経済的なものの交換が成立していると。従って均衡のとれた互酬性が接待ということになる。また均衡のとれた互酬性を示唆する記述が聖書の中にも見られる。「はっきり言うておく。私の弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は必ずその報いを受ける」(マタイによる福音書10:42)。

ところでSahlinsの言葉で言えば、一般的互酬性、別の表現をすれば、利他的行為や純粋な贈与は、古代宗教にも見られる。それは、施与の道徳で、人にもものを与えるということが、仏教の社会倫理の第一歩として尊ばれてきたのである(中村、1965)。すなわち「食物を求める人々には食物を与え、飲料を求める人々には飲料を与え、乗り物を求める人々には乗り物を与え、衣を求める人

には衣を与え、装飾品を求める人には装飾品を与え(中略)光明を求める人々には光明を与える」のように原始仏教においては施与の道徳が強調されている。

同様の利他的行為、純粹の贈与は聖書の中にも見られる。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いているときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」(マタイによる福音書 25:35) 以上のことから、おそらく接待とは、一般的互酬性と均衡のとれた互酬性の両方を含んだものを意味するのであろう。

接待者の心理学的過程に関しては従来の研究では皆無であったが、接待をすることの心理的効用があることが見出された。すなわち、接待を行なうということは、「充実した」、「楽しい」、「ゆったりした」、「平穏な」、「のどかな」といった肯定的感情を接待者に生じさせることが明らかになった。更にこうした肯定的感情と関連する変数は共感性である。共感性の中でも情動的共感性は、「やる気に満ちた」、「充実した」、「活気のある」といった積極型感情の因子と有意な関係がある。換言すれば、情動的共感性の高い人々は、低い人々に比べて、高い積極型感情を抱えていることが明らかになった。接待はポジティブな感情を生み出すが、共感性の高い人々にはその効果が顕著に現れるのではないかと推測される。

遍路者への接待動機、具体的には「自分の代わりにお遍路をしてくれていると思うから」「激励のため」といった接待動機を強くもつ人々は、接待を行なって「やる気にみちた」、「充実した」、「活気があると」という感情を強く抱えていることが明らかになった。積極型感情の簡便的因子得点と二つの動機との相関係数が有意であった。

接待経験を規定している要因を明らかにするために重回帰分析を試みた。接待経験を従属変数として、年齢、性、信仰する宗教の有無、共感性を予測変数として投入した。得られた重回帰方程式は以下である。

接待経験 = .32 年齢 - .09 性別 + .09 信仰する宗教の有無 + .09 情動的共感性 ($R = .40$) であり、有意な β 係数は年齢のみであった。年齢が高い

人々は接待をする傾向にあることが、逆に若い人々は接待をしない傾向があることが明らかになった。接待を行なっているという習慣行動や接待をすべきであるという社会規範が廃れていく傾向にあることを示しているのかもしれない。だが接待経験がある人は 100% 接待を続けたいと応えているし、また接待経験のない人でも 66% の人が接待をしてみたいと回答していることから、これからも接待が続いていくと予測できる。

また興味深いことに、宗教に対する信念や態度は接待にリンクしていない。宗教的信仰の有無は接待を行なうこととは無関係なのである。恐らく既成の宗教は、接待を行なうということには作用しないと考えることができる。従来からある既成の宗教ではなく、むしろ四国独特の太子信仰がその背後にあるのかもしれない。加賀(2004)によると、太子信仰は歴史のなかで形成された庶民の宗教意識を表すものである。そして遍路の太子信仰は、太子の縁につながる四国を遍路することによって、先祖・死者の供養や健康祈願、病気平癒、家内安全などの現世利益を求める意識と行為の総称である。今後太子信仰を測定する尺度を含めた調査を行うことが将来の課題であろう。

引用文献

- Frey, N. L. (1998). *Pilgrim Stories*. University of California Press.
- 藤原武弘 (2003). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学研究 (6) 関西学院大学社会学部紀要 93 号, 73-91.
- 藤沢真理子 (1997). 風の祈り - 四国遍路とボランティアズム 創風社
- 星野英紀 (2001). 四国遍路の宗教学的的研究 - その構造と近現代の展開 法蔵館
- 星野英紀 (2002). 現代四国遍路と接待 - 遍路道沿道住民のアンケート調査から - 頼瑠僧正七百年御遠忌記念論集, 新義真言教学の研究 大蔵出版 1097-1110.
- 星野英紀・浅川康宏 (2011). 四国遍路 吉川弘文館
- 加賀美智子 (2004). 四国遍路に関する一考察 高野山大学論叢, 39, 41-68.
- 高知県企画振興部企画調整課 (2003). ころのふれあう遍路みちづくりアンケート調査報告書 高知県
- Maemura, N., Kosugi, K., & Fujihara, T. (2007). "The de-

velopment of an empathetic ability scales using the item response theory.” Unpublished paper presented at 72nd Annual Meeting of the Psychometric Society, Tokyo-Japan.

前田卓 (1971). 巡礼の社会学 ミネルヴァ書房

長田攻一・坂田正顕・関三雄 (編) (2003). 現代の四国遍路 学文社

中村元 (1965). 宗教と社会倫理—古代宗教の社会理想— 岩波書店

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.

Sahlins, M. (1972). Stone age economics. Aldine. 山内昶 (訳) 石器時代の経済学 法政大学出版会

坂田正顕 (1999). 現代遍路主体の分化類型としての「徒歩遍路」と「車遍路」社会学年誌, 40, 27-46.

付記

本稿は筆者の指導の下に作成された論文に基づいている。記して感謝を表す。

井上絵里加「四国遍路における接待について」関西学院大学社会学部 2011 年度卒業論文

Shikoku Pilgrimage and *Settai*

ABSTRACT

The Shikoku pilgrimage is a pilgrimage to the 88 temples on the island of Shikoku in Japan. *Settai* is the custom of providing support to the people who go on this pilgrimage. Some people along the pilgrimage route offer a rest place and food for free. Shikoku is the only place where the tradition of *settai* exists deeply. Seventy three residents were asked to participate in a survey interview. The results indicated that *settai* ratio was 44% with motive of encouragement, assistance, and offering to Kobo Daishi via the pilgrims. Multiple regression analysis indicated that age was the only determinants of *settai*.

Key words: Shikoku pilgrimage, *settai*, hospitality